

2012 年度卒業論文 小熊英二研究室
平成 25 年 3 月 31 日 (日)

日本における伝統仏教寺院の持続可能性

慶應義塾大学 環境情報学部 4 年
徳本 修
学籍番号 : 70946440
CNS-ID : t09644st

—目次—

第1章 序論

- 第1節 研究の背景
- 第2節 研究の概要
- 第3節 研究の目的
- 第4節 対象設定
- 第5節 方法論

第2章 本論

- 第1節 現代における日本の伝統仏教の現状と時代的背景
- 第2節 日本における社会参加仏教を概説するにあたって
- 第3節 具体的事例
 - 第1項 神宮寺
 - 第2項 應典院
 - 第3項 光明寺
 - 第4項 安楽寺
 - 第5項 妙徳教会

第3章 結論

- 第1節 事例の考察
- 第2節 これからのお寺のあり方

謝辞

参考文献

第1章 序論

(1-1. 研究の背景)

日本の伝統仏教は崩壊の危機に瀕している。なぜ、伝統仏教がそのような窮地に立たされているのかと聞かれれば、その背景には実に様々な要因がある。葬式仏教の変移、檀家制度の瓦解、家族的経営の限界性、都市化と少子化等々、その詳細については本論で考察したいが、日本の伝統仏教を覆う深刻な大難から抜け出す方策を早急に考え、実行に移さなければ、伝統仏教の崩壊を食い止めることはできないであろう。個人の立場や宗派の垣根を超えて、現代の寺院に何ができるかを考え、具体的な方策を立てることは緊急不可欠の課題である。

そして私自身も、伝統仏教が抱える問題に直面している僧侶の一人である。私の実家は古くから寺院を営んでおり、将来の跡取りとなる私は10歳の時に本山で得度を受式し、11歳で黒衣を纏い、初めて曲録に腰を下ろし法要に参加した。それ以来、一介の坊主としてお寺の行事に従事するのが私にとって当たり前となり、年を重ねるにつれて多くの僧と交流を持つようになる。そうすると、日本の伝統仏教の深刻な実情を認識せざるを得ない状況となるのが必然であり、現状を打開する術はないかと思案をめぐらす機会が自然と多くなっていった。

果たして、本当に現代の日本の伝統仏教は周囲から叱咤激励されるほど元気がなく、将来の方向性も見えず、ただ批判をあびるだけのものに成り下がってしまったのだろうか。過酷な状況に立たされているのが事実であるとしても、まだ顕在化していない、潜在的な力をお寺は持っているのではないだろうか。伝統仏教は日本に伝来して以来、1500年近くを生き続け、日本人の生き方や精神性、あるいは文化や芸術などに大きな影響を与えてきたのだから、お寺はそれだけの能力を持ち合わせているのではないだろうか。目には見えない、お寺に秘められている能力を見出し、「苦」が満ちる現代社会にそれを有効に生かすことは、伝統仏教自体を活性化させることになりはしないか。

私の研究の背景は、そのような伝統仏教寺院に対する期待であり、地方寺院を担っていく一人の坊主として果たすべき役目でもある。これからの日本の仏教寺院をどのように積極的に今日の状況の中で生かしていけるかということをもう一度根本からひとつひとつ確認していくことが必要である。今日の伝統仏教の危機は、日本の僧侶の長年の鈍感が招いたという意味で自業自得といえるかもしれない。これに気が付き、改善をはかるには、私を含めた多くの僧侶たちが強力な変革への意思を持つことが必要である。

(1-2. 研究の概要)

本研究は、現代の伝統仏教寺院の持続可能なモデルを探求することを旨とする。特に、仏教寺院そのものに焦点を当てるのではなく、お寺を取り巻く様々な環境やコミュニティを包括して考え、現代のお寺の在り方を模索していきたい。そのために、伝統仏教の古い枠組みにとらわれていない、新しい取り組みを行っているお寺の事例を元に考察を進める。その際には、従来、著名な学者によって行われてきた、仏教の教義の現代的意義や、その可能性について考察することには重点を置かず、それらの母体である寺院を如何にして持続可能なかたちにするかを大局的に検討することを重視する。

お寺は檀家だけではなく、その他にも多くのコミュニティを有し、多くの人々と密接に結びついている。地方のお寺が幼稚園や保育園を併設している風景を目にした覚えがある方は多いと思うが、お寺はそれ以外にも様々な地域コミュニティと境を接している。本研究でケースとして挙げるお寺は、それら多様なコミュニティを包括して考え、お寺の革新を成功させた画期的な事例である。

本論では、第1節で現代における日本の伝統仏教の現状と時代背景について詳細に論じたのち、第2節で社会的活動を行うお寺の動きとその影響についてまとめている。そして、第3節では具体的な事例を概説し、終章でそれらの事例を考察し、事例から読み取ることができる様々な要素を繋げ、現代のお寺が持つ問題を分析、理解、解決していくために必要となる要件を検討している。

(1-3. 研究の目的)

冒頭で述べたとおり、かつては世俗的にも権威の一面を持った寺院は、いまや瀕死の状態にある。大衆は伝統仏教を見限っており、「仏教などあってもなくてもいい」もしくは「坊主は葬式と法事だけやればいい」「お寺に期待したって何も変わらない」という見切り感を持っている。しかし、それにもかかわらず、当事者の坊主たちにはそれらの現状に対する切迫感を感じることはできない。そのような現状の背景には様々な要因が存在する。まず、坊主の社会は能力の優劣に関係のない長老主義と大寺権威主義という堅固なヒエラルキーの中にあり、檀家システムというスポンサーシップに依存し、再教育の場を持たない。そして坊主は努力しなくても生きていける独特の社会にあり、いくつもの権威らしきものに守られた閉鎖的依存型社会で生きているのだ。

寺院が持つ現状の問題に対する解決策を見出すことができないのであれば、おそらく今後寺院は淘汰されて数が減り、かつ多様化していくであろう。各寺院が持つ、何らかの特徴を最大限に生かしていかなければ寺院の継続は難しいものとなる。当研究の目的

は、日本社会に存在する伝統仏教寺院が抱える問題を打開する理想なお寺のあり方を、今後の日本の寺院を担っていく多くの僧侶に提起することである。世俗化と近代化の時代を経て変貌を遂げた仏教寺院を前にして、当研究が問題解決のための一端となれば幸甚である。

(1-4. 対象設定)

本研究が対象とするのは寺院を基盤とした社会的活動を展開している、国内でも有数の伝統仏教寺院である。これらの寺院は社会参加仏教と呼ばれる領域に属する現代仏教の新しい形である。本論で事例として取り上げる寺院は下記のものとする。

- ・臨済宗 神宮寺
- ・浄土宗 大蓮寺應典院塔頭
- ・浄土真宗本願寺派 光明寺
- ・浄土真宗本願寺派 安楽寺
- ・日蓮宗 妙徳教会

(1-5. 方法論)

研究手法においては、文献調査を起点としたケーススタディを主たるものとしている。主に現代の伝統仏教の新たな可能性を模索し、お寺を基盤とした画期的な取り組みについて考察している著書を参考とした上で、お寺の持続可能性を探求していきたい。第3章では特に、前節で事例として挙げた寺院の取り組みを概観し、歴史的背景を踏まえた上で考察をしていく。

(2-1. 現代における日本の伝統仏教の現状と時代的背景)

日本の伝統仏教が「葬式仏教」と揶揄されるようになって久しいが、なぜ現代の伝統仏教は本来の教義から離れた特定の儀礼に重きを置くようになったのであろうか。

葬式仏教の歴史をたどると、江戸時代に幕府によって推進された宗教統制政策にまで遡る必要がある。その中でも特に重要なのが「寺檀制度¹」である。寺檀制度は、キリシタン禁制を行った宗門改めに由来し、すべての人民を家単位でどこかの寺院に檀家として登録することにより、キリシタンでないことを証明させるというものである。婚姻や旅行を行う際には寺院が発行する寺請証文を必要とし（寺請制度）、島原の乱後には、「宗旨人別帳」を宗門改役に提出することが義務付けられることとなる。そして、お寺は宗旨人別帳に檀家の家族構成、それぞれの生没、結婚、旅行、移住、奉公人の出入りなどを記入し、それらをすべて記録したのだ。これは宗教統制政策の枠を超えて、戸籍としての役割を担うこととなる。各寺院は行政組織の末端に位置付けられ、今でいう役所の戸籍係の役割を果たすこととなったのだ。また、「戒名」という慣習が庶民にまで浸透したのも寺請制度が導入されたこの頃であり、キリシタンや不受不施派でないことを証明する証として、戒名を授かることが義務として課された。そして、戒名にランクが伴うことによって、村の身分秩序を安定させる役割をも担うようになったのである。

寺檀制度の確立によって、仏教は一面では保護され、葬式仏教という独自の形態を定着させ、それが現代の葬式仏教に繋がっている。寺院は宗旨人別帳によって生者の監督に当たるとともに、墓地を管理し、過去帳を整理することによって死者をも管轄するという大きな役割を課せられていたのである。明治時代に入ってこれらの制度の束縛がなくなり、宗教の自由が認められるようになっても、寺院による家単位の墓地の管理は続き、葬式仏教は寺院を支える大きな経済的基盤であると同時に、仏教は草の根レベルでも大きな影響力を持ち続けた。

以上のように、個人の義務であった寺檀制度の導入以降、葬式や戒名の慣習が世間に広まったが、それは近代に受け継がれ、今日にまで及んでいるのだ。これらの葬儀に係る収入は、現代のお寺にとって収入の大部分を占める経済基盤であり、戦後の農地改革によって、それまで小作に出していた土地を奪われた寺院は、その運営を葬儀収入に大きく頼らざるを得ない状況が現代でも続いている。

¹ 寺檀制度については末木文美士（2006）『日本宗教史』岩波新書を参考。

しかしながら、現代の流れはその葬儀すら僧侶から取り上げてしまうかのような勢いだ。都市化と核家族化によって、「家」が崩壊し、檀家システムが崩れつつあり、寺と檀家の繋がりが希薄になってきている。また、バブル崩壊以降、消費者感覚を強めた人々は、寺院と僧侶の役割や在り方に厳しい目を向けるようになり、葬儀や戒名に対する不信感が増大し、お寺の存在理由が根本的に問われるようになってきたのだ。「葬式は、いらぬ²」という、お寺が持つ金銭面の不透明さを批判する著作がベストセラーとなることを鑑みても、葬式仏教が人々の不満を募らせていることは明らかである。直葬をはじめとした新たな葬儀システムの台頭、大手企業による葬儀事業への新規参入などにより、お寺がこれまで担ってきた役割は徐々に縮小している。また、家族的経営を行っている寺院は後継者不足によって「住職不在」のものが増加し、今後数を減らしていくことは明らかである。

そのような時代の流れは、長年にわたって寺院が檀家制度の上にあぐらをかいていた結果であり、自業自得であるといえる。そして、現代社会の仏教の在り方を問う風潮とは裏腹に、当のお寺の動きは緩慢であり、危機感や焦りといったものを感じとることはできない。伝統仏教はこれまで葬式仏教と揶揄されながらも、葬儀を重要な布教の場として位置づけ、教義を少しでも広める柱としてきた。仏教界はその貴重な「場」を失うことが、教義を広めるという重要な機会を失うことに繋がり、根本的なお寺の存在意義に関わる問題であることを明確に認識する必要がある。このように、現代の仏教寺院は様々な意味で、壊滅の危機に瀕しているのだ。

(2-2. 日本における社会参加仏教を概説するにあたって)

従来行われてきた法事や葬儀といった儀礼が、現代においては徐々にその力を失ってきている。そのような状況に加えて、お寺の求心力が限りなく低下している現在では、ただ漫然と法事や葬儀を行うだけでは、人々に仏教を届けることは困難となってきた。現代において仏教を人々の心に届けるには、まずはそのための環境づくりから取り組む必要があるのだ。

そしていま、現代の日本仏教が置かれている状況をみて、「葬式仏教のイメージは人々の精神的に渴きに応じることはできない」と認識し、「今、行動しなければ日本仏教は死に絶える」という危機感を持つ僧侶の動きが徐々に広まっている。門を閉ざしたお寺

² 島田裕巳 (2010) 『葬式は、いらぬ』 幻冬舎新書を参照。

が社会とのつながりを失っている現状を抜け出そうとしているのだ。以前であれば、法事や葬儀に限らず、子どもは境内で遊び寺子屋で学び、大人は地域の寄り合いを行ったり祭りを楽しんだりとお寺はその地域の日常生活の一部として存在していた。しかし、時代とともにお寺と人々を繋ぐ関係性は失われ、お寺は人々にとって歴史的建造物としての価値しか持たなくなってしまった。

これから紹介する5つの事例は、寺院がかつて持っていた社会的な役割を果たそうと、様々な取り組みを行っている画期的なケースである。近年、教育・医療・福祉をはじめとする、多岐にわたるお寺の社会的活動を通して、お寺に元気を取り戻すための動きが活発になってきている。そのような全国的な動きは、これから紹介する寺院が先駆的に新しい取り組みを始めたことと深く関係している。

しかし、そのようなお寺の社会的活動に対して批判が浴びせられるケースも少なくない。次節で紹介するお寺も同様に、仏教関係者から批判が投げつけられる様を目にすることが多い。「仏教とは伝統を守るものである」として、現代の状況に適合したお寺の在り方を模索する動きを牽制する者が仏教の世界には数多く存在する。

しかし、お寺が社会的活動を行うことは、心の問題ばかりではなく、社会的な問題においても仏教が果たせる役割を追及するものである。社会に向けて積極的に働きかけていこうとする仏教寺院のあり方は、社会参加仏教と呼ばれ、世界の仏教の大きな課題であり、日本でも大きく取り上げられるようになってきた。現在、国内で行動に移されている社会参加仏教について、具体的事例を通し、日本仏教の潮流を概観することによって、その存在意義と持続可能性について考えていきたい。

(2-3. 具体的事例)

【第1項 神宮寺³⁾】

(所在地)

長野県松本市浅間温泉 3-21-2

(沿革⁴⁾)

神宮寺の創建は不詳であるが、隣接する御射神社(旧浅間社)の別当寺院として開かれたのが始まりと伝えられている。正応5年(1292年)に円空が神宮寺にて大般若經の写經を行い浅間社に奉納しており、当初は真言宗の寺院であったが永禄2年(1559年)に建長寺の末寺となり臨済宗に改宗している。歴代領主から庇護され延宝2年(1674年)には当時の松本城の城主水野忠直の生母清陽院の祈願により薬師堂が建立(現在の薬師堂は昭和33年に再建した建物)。寺宝で薬師堂の本尊木造薬師如来座像は藤原時代に製作されたと推定されるもので、像高73.6cm、桧材一木造り、彫眼、松本市重要文化財に指定されている。

(概要)

本論で様々なお寺の事例を考察する中で、信州松本の地にあるこの神宮寺を抜きにして、日本の伝統仏教の新たな潮流を論じることはできない。住職である高橋卓志氏によるユニークな活動を挙げればきりが無いが、ここでは「尋常浅間学校」と「ケアタウン浅間温泉」という二つの取り組みに絞って主に紹介をしたい。

「尋常浅間学校」とは、1997年から2007年にかけて計100回実地された「寺子屋的な学びの場」である。校長を永六輔、教頭を無着成恭が務めており、毎月登壇する講師の陣容は、キャスターの筑紫哲也、詩人の谷川俊太郎、山尾三省、俳優の小沢昭一、加藤武、マルセ太郎、タレントのおすぎとピーコ、作家の灰谷健次郎、立松和平、小田実、井出孫六、中山千夏、柳原和子、エッセイストの佐々木久子、阿川和子、言論界ではアルフォンス・デーケン、辛淑玉、歌手の小室等、森山良子、長谷川きよし等々、錚々たる面々である。それもただ有名人を招いて講座を行うといった単純なイベントではな

³⁾ 神宮寺については高橋卓志(2009)『寺よ、変われ』岩波新書を参考。

⁴⁾ 神宮寺の沿革については神宮寺(松本市・浅間温泉) <<http://asama.chakin.com/jinguu.html>>(2013/1/12 アクセス)を参考。

く、政治・教育・医療・芸術など、幅広い分野に沿った講義を行い、高橋氏はこれを「いのちを学ぶ場」であるとしている。毎回の参加者は平均 400 人以上であり、参加人数の総計はのべ 2 万 7 千人である。また、通常の授業だけではなく、沖縄やカンボジアへの修学旅行、宿泊付きの林間学校、テーマを福祉に定めた 6 時間シンポジウム、2 泊 3 日をかけて行われる「お葬式の見本市」と葬儀のシミュレーション、「全国坊さんサミット」など、尋常浅間学校の取り組みは学びにとどまらず、ユーモア溢れる要素を多分に含む様々な企画が実現された。それらの取り組みは仏教関係者からの風当たりが強く、高橋氏は「イベント坊主」と揶揄されたが、尋常浅間学校が開校して以来、全国のお寺で本堂や境内を利用したコンサートやイベントが目立つようになる。法要以外で寺に足を運ぶ人々が途絶えていることを憂慮した各地の僧侶たちが行動を起こすようになり、明らかに風向きが変わってきたのである。「寺にくるほとんどの人々が信仰を求めているのではない」と高橋氏は言う。「尋常浅間学校に来場する人々が直接、宗教的な何かを求めようとはしていない。広報で知ったイベントに興味を持ち、あるいは偶然にも参加して、イベントに触れただけの話だ。しかし、そこが寺であるわけだから、会場となった境内の環境に出会い、本堂にしみついた仏教の匂いのかすかでも嗅ぐことになる。そのことが大切なのであり、それで十分だと思う。実際に、この学校への参加がきっかけとなり、その後、深い教えに導かれた方は数多い」。

尋常浅間学校はあえて「信仰」を振りかざすことをせず、観念的ではない「いのち」全般に関わる講義を展開した。内容は口伝えで広がり、重厚なネットワークを構成し、神宮寺の在り方に共感した方々が支援者、あるいは檀家となり、本堂を賑わせている。

次に、高橋氏が現在において主たる活動として取り組んでいる「ケアタウン浅間温泉」の活動について述べたい。「ケアタウン浅間温泉」は、現地の老舗旅館である「御殿の湯」が廃業するのに際し、その後の運用が高橋氏に一任されたのが活動の発端である。ケアタウン浅間温泉は「御殿の湯」を通所介護施設とし、隣の「東御殿の湯」を利用して訪問介護を行う介護事業所として、高齢者の介護とその家族を支援する事業体として活動を行っている。この事業は個人の意思を重視した生き方を推進する NPO 法人「ライフデザインセンター」と協働で運営されており、当団体には医師、看護師、弁護士、税理士、公認会計士、社労士、行政書士、土地家屋調査士、牧師、看護福祉士、ケアマネージャーなど、神宮寺がそれまでに築いてきた重厚なネットワークに連なる人々が集っている。この二つの組織により、高齢者の身元引受から法定後見、遺言作成、入院、看取り、葬儀執行までの一貫したケア・システムが構築されている。ここで使用されている「旅立ちデザインノート」は、高齢者に自分自身のいのちの行方について考えてもらうものであるが、それは本来、僧侶が行うデス・エデュケーションである。しかし、デス・エデュケーションを円滑に推進するための人材を集い、実行に移す活動はこれまでにない一層の厚みと展開を見せている。この取り組みは新たなデイサービス拠点として地域住民に捉えられ、定員はすぐに埋まり、現在高橋氏は、在宅ホスピスの設立に向

けた準備を進めている。地域に住む高齢者の老・病・死に密着したケアタウン浅間温泉は、寺とケアの関係性について新たな可能性を示唆している。地域包括型の総合ケアモデルの新規性と重要性は、今後の高齢社会でより認知されていくであろう。「寺がコミュニティを意識し、ケアの本質を意識し、具体的な行動に出れば、その寺の周辺地域は必ずいい方向に変わっていく」と高橋氏は語る。ケアタウン浅間温泉は、かつての相互扶助の役割をお寺が担っていく様相を示す画期的な先例である。

【第2項 大蓮寺 應典院塔頭⁵】

(所在地)

大阪市天王寺区下寺町 1-1-27

(沿革⁶)

天文 19 年 (1550 年) 3 月 5 日、時の将軍足利義晴の三男坊・晴誉上人により、足利家の大坂祈願所として創建。当時 5 千坪を有したといわれる大蓮寺は、その頃から大阪屈指の寺院として名高く、近世には徳川家の祈願所として愛護され、浄土宗別格寺院としての威容を誇った。広大な寺域ではしばしば出開帳や勧進興行が催され、また大坂 33ヶ所観音巡礼の札所としても知られ、往時のにぎわいは近松門左衛門の名作「曾根崎心中」にも描かれている。應典院は慶長 19 (1614) 年 5 月、大蓮寺の塔頭として創建。昭和 20 (1945) 年 3 月 14 日大阪大空襲により焼失したが、平成 8 年に再建、生涯学習に取り組むなど、文字通り地域文教の寺院として広く親しまれている。

(概要)

仏教寺院の新たな潮流として、神宮寺と並び称されるのが、大阪天王寺区の大蓮寺應典院である。地域の人々には劇場型寺院として広く知られている。

大蓮寺の住職である秋田光彦氏が代表を務める、大蓮寺の塔頭⁷である應典院は、寺院でありながら檀家を持たず、葬式を行うことがない、葬式仏教の形にとらわれていない特異なケースである。それではこのお寺はいったい何をしているのかというと、

⁵ 應典院については秋田光彦 (2011) 『葬式をしない寺 大阪・應典院の挑戦』新潮新書を参考。

⁶ 大蓮寺ドットコム—大蓮寺 <http://www.dairenji.com/dairenji/dairenji_3.html> (2013/1/2 アクセス)を参考。

⁷ 寺の境内内にある脇寺。

「應典院寺町倶楽部」という NPO が中心となってアート活動を行っているのである。表現の場を求める若者の声の本堂で途切れることはなく、秋田氏は應典院を「若い世代に発信できる寺」として推進している。

大連寺は浄土宗のお寺であり、秋田氏自身も浄土宗の僧侶であるが、應典院は宗派を問うことなく、万人が参加することが可能な会員制のお寺である。若い世代の学者やランナーたちと共に練り上げられたコンセプトは「学び・癒し・楽しみ」である。

SFC を思わせる現代建築は美術館のような雰囲気を出しており、ロビーからは一面に広がる墓地を見渡すことができる。直径 14 メートル、高さ 7 メートルの円形ホールは音響設備や照明設備が完備されており、本格的な劇場として構成されているが、それはまぎれもない「本堂」なのである。その他にもセミナー室が 2 つ設けられており、1 階と 2 階をつなぐスペースはオープングャラリーとして開放されている。應典院は日本で最も若者が集まるお寺であり、その設備を利用した、講義・講演・演劇・音楽・セラピーなどといった、そこで催される活動は多岐にわたる。繁忙期には月に 5 劇団の公演があり、本堂は練習と舞台作りと本番と撤収で連日数多くの人々が入り出りする。

活動の発端は、浄土宗に属する若手の僧侶 100 名からなる「教化情報センター21」であった。秋田氏自ら事務局長となったこの若手僧侶の会は 1989 年の「仏教サウンド考古学」でご詠歌からセラピーミュージックまで音楽をライブで表現するという一風変わった企画でスタートを切り、「宗教メディア進化論」、「21 世紀の伝統仏教を予測する」というワークショップを全国で展開した。その他にも様々な現代仏教をめぐる問題群をスポットに当てた企画を催し、教化情報センターが急進的な成長を見せはじめた矢先に、オウム真理教事件が起こる。秋田氏が現在の應典院を構想しはじめたのはこの頃である。

既成教団の教義が若者に届くことはなく、その現状をただ傍観している伝統仏教の姿を歯がゆく思っていた秋田氏は、当時再建計画が持ち上がっていた應典院の新しい NPO 型のスタイルを構想し、その計画を一任される。90 年頃からアユスの関西支部を務めていた秋田氏は、アジア仏教国の寺院が地域の活動の中心となっている様相を目にしており、その中に仏教の原型を見出した。そして、現在の應典院が完成する。「應典院寺町倶楽部」という NPO が自分たちの使命を掲げ、コンセプトに賛同する会員を募り運営していく、当時としては前代未聞な型破りなお寺の誕生であった。アートとしての仏教寺院である應典院は、まさに持続可能なお寺のモデルを体現している。應典院は「学び・楽しみ・癒し」の場であり、「社会的芸術」の場として大阪の地に根付いているのだ。

アートに携わる人間というのは、日常生活に埋没している私たちの目には見えなくなっている「光」や「影」を見ることのできる人たちである。鎌倉新仏教⁸の勃興期に

⁸ 鎌倉新仏教については末木文美士(1996)『日本仏教史-思想史としてのアプローチ』を参照。

誕生した日本仏教の祖師を思い返してみても、彼らは皆「社会芸術家」であった。その独自の表現によって、私たちを目覚めさせ、生きることの新しい意味を気づかせてくれる、そのような「社会芸術家」としての僧侶が、現代で求められているのではないだろうか。「寺よ、僧侶よ、アーティストたれ！」それが應典院、秋田氏の仏教界へのメッセージである。

【第3項 光明寺⁹】

(所在地)

東京都港区虎ノ門 3-25-1

(沿革¹⁰)

建暦2年(1212年)に天台宗の了栄によって桜田霞ヶ関に常楽寺として創建。嘉禄2年(1226年)に親鸞聖人の教化を縁に了栄は天台宗から浄土真宗に宗旨を改める。天文9年(1540年)には常楽寺の名を改め光明寺と称する。そして慶長9年(1604年)には江戸幕府の江戸城拡張にあたって、霞ヶ関の地より現在の西ノ久保に移転し現在に至る。大戦の最中、空襲によって火災に遭うも、昭和45年に本堂庫裏を再建。

(概要)

光明寺は「神谷町オープンテラス」という名のオープンスペースを一般に開放している、「開かれたお寺」を実践する都心にある浄土真宗の寺院である。

神谷町オープンテラスは、毎日お昼時になると地域で働くサラリーマンやOLが集い、大変な賑わいを見せるという。希望者にはお茶やコーヒー、手作りの和菓子が振る舞われる。お寺に訪れる人がいればもてなすというお寺側の当たり前の気持ちに呼応するかのよう、開け離れた本堂の入り口に立ち、自然と御本尊に手を合わせていく人の姿が目立つのが印象的であるという。神谷町オープンテラスは当初は僧侶が常駐しており、お寺を訪れる人々が友人同士で語り合い、僧侶と多少の会話をする程度の静かな空間であった。しかし、オープンテラスを訪れる人々は同じ地域で仕事をしているという共通点からか、次第にテラスにいる者同士で言葉を交わすことが多くなり、互いに親しくなるということが起こるようになる。従来、ある意味では僧侶に占有されていたお寺とい

⁹ 光明寺については虚空山彼岸寺(2010)『お坊さんはなぜ夜お寺を抜け出すのか?』現代書館を参考。

¹⁰ 光明寺・浄土真宗本願寺派光明寺<<http://www.komyo.net/web/nenpyou2.html>>(2012/12/20 アクセス)を参考。

う空間が、地域の人々に広く開放され、地域性の薄い東京という土地に共生感を芽生えさせ、多くの人々に仏教の息吹を味わってもらえる特殊な場となっている。

現在、神谷町オープンテラスは光明寺の仏教青年会が主に運営を行っているが、発足当初は「虚空山彼岸寺」の取り組みの一つであった。虚空山彼岸寺とは、宗派を超えた仏教徒や一般の人々が新しい時代の仏教について考え行動をする、インターネット上のお寺である。インターネット上に建立された前代未聞のこのお寺は¹¹、凝り固まった伝統仏教をときほぐし、今に生きる仏教を再編集するために創られた、新しいメディアである。

その設立者であり、光明寺の僧侶でもある松本紹圭氏は神谷町オープンテラスに先立って、お寺の音楽界「誰そ彼¹²」をプロデュースしている。「誰そ彼」は、お寺の本堂を利用した音楽ライブイベントであり、読経や法話を交えたジャンルを問わない音楽の演奏会である。本堂の出入りを自由にした上で、海外アーティストを含む幅広い出演者に「お寺で聞いたら気持ちがいいだろうな」という音楽を演奏してもらい、テラス部分では料理層の青江覚峰氏による料理が振る舞われる。イベントの特性が場所を問うものではないため、地方のお寺から依頼があれば、出張して公演を行うという。神谷町オープンテラスは誰そ彼が地域に定着していく中で、お寺がさらなる人々との接点を求めて作られたものだ。

人と人との繋がりが希薄となった時代であるが、東京という土地はとくにその傾向が強く、隣人がすべからず他人であることが実情である。そのような時代に立ち向かうかのように松本氏をはじめとするこれからのお寺を担っていく若手の僧侶たちが、寺院や僧侶が持つ特色を活かした取り組みを行っている。その活動内容は虚空山彼岸寺を通して全国のお寺に発信され、お寺の改革に足踏みをしている僧侶たちを喚起し、既存の仏教をより良くしていこうと働きかけている。

¹¹ 彼岸寺 | 超宗派仏教徒によるインターネット寺院 <<http://www.higan.net/>> (2012/11/1 アクセス)を参照。

¹² お寺の音楽会 誰そ彼 / Twilight Festival - TASOGARE - <<http://www.taso.jp/>> (2012/11/1 アクセス)を参照。

【第4項 安楽寺¹³⁾】

(所在地)

東京都港区芝 1-12-18

(沿革¹⁴⁾)

天正 10 年 (1582 年) に創建。大正 12 年 (1923 年) に関東大震災によって本堂が倒壊するも、昭和 4 年に再建。昭和 20 年に大戦による空襲を免れ終戦を迎える。平成 9 年には本堂を改修し、庫裡改築落慶法要を行う。平成 21 年に 17 代目の住職として藤澤克己が継職し現在に至る。

(概要)

日本における自殺率は、主要先進国の中でも最も多く、深刻な社会問題となって久しい。平成 25 年 1 月に発表された警察庁統計資料¹⁵⁾によれば、平成 24 年における国内の年間自殺者数は 27,766 人にのぼるといふ。国内の自殺者は平成 23 年まで 14 年連続で 3 万人以上を記録しており、平成 24 年の自殺者数は 15 年ぶりに年間 3 万人台をようやく下回った。2006 年に自殺対策基本法が施行され、内閣府に自殺対策総合対策会議が作られ、2010 年には「いのちを守る自作対策緊急プラン」が策定されたが、依然として自らの命を絶つ者は後を絶たない。

安楽寺の住職を務める藤澤克己氏は「安心して悩むことのできる社会の実現」を標榜し、2007 年に「自殺対策に取り組む僧侶の会」を立ち上げ、代表に就任した。発足当初は、思いを同じくする僧侶 11 名で始まったが、現在では八宗派、43 人の僧侶とともに活動を行っている。同会では安楽寺を母体として自死に関する悩みを手紙で受け付ける「自死の問い・お坊さんとの往復書簡」という従来にはない方法によって自殺対策に取り組んでいる。3 人で 1 グループを形成し、相談者からの手紙を元に書簡をたしなめ、グループ内で相手の気持ちを慮り、幾度も反芻しながら返事を書きあげていくという方法をとっている。この取り組みは 2008 年から続いており、これまでに届いた書簡は 2400 通に達している。一月あたり 70 通から 80 通の書簡が届き、事後検証会で全件チェックによる見直しを行っているという。

¹³⁾ 安楽寺については北川順也 (2011) 『お寺が救う無縁社会』 幻冬舎ルネッサンス新書を参考。

¹⁴⁾ 安楽寺 浄土真宗 本願寺派 (東京都港区) お寺の沿革について <<http://homepage2.nifty.com/anrakuji/about.html#enkaku>> (2013/1/3 アクセス) を参考。

¹⁵⁾ 警察庁統計資料 「平成 24 年の月別の自殺者数について」 <<http://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/H24tukibetsujisatsusya.pdf>> (2013/1/20 アクセス) を参照。

相談者から送られてくる手紙の1通1通に大変な時間と労力を費やし、返書を書くことは、人への思いを強くし、僧侶も育てられていると藤澤氏はいう。2か月に一度開かれる事例検討会では、いくつかの書簡を取り上げ、文案作成の追体験をするということと同会に従事する者の質を高めているという。また、「自作対策に取り組む僧侶の会」は自殺者の遺族に対するケアを行っており、「自死遺族のための追悼法要」を毎年12月に開催している。

藤澤氏は浄土真宗本願寺派東京教区自死問題専門委員として仏教界への啓発、提言も積極的に行っている。この委員会が作成する「自死に向き合う」というハンドブックは光照寺の周辺にとどまらず、曹洞宗でも出版されており、宗派の垣根を越えた広がりを見せ、異なる宗派が協働する流れが形成されつつある。各地に自殺対策に関するネットワークができ始め、同会の取り組みをきっかけとして十勝市では浄土真宗本願寺派十勝組の若手僧侶によって自死対策研修会が開かれた。

藤澤氏は次のように語る。「仏教には生死一如という言葉があります。生きることと死ぬことを別のことであるとは仏教では考えない。死ぬというのはその日まで生き切ることであり、生も死も表裏一体だと考えます。では、生きるとはどういうことか。生きる意味はなんだろうか。その答えは簡単には見つかりません。しかし、それでも答えを見つけようと自問自答しながら生きていく。それが仏教者の姿だと思います。それも一人ではなく、お仲間と一緒にやっていく。終わりなき歩みとともに——。私の中のキーワードです¹⁶」

僧侶とは根底的に人間が好きで、相談者の気持ちを理解し分かち合い、共に苦しみを一つずつ取り除き、生きる意志を生起させる役割を担うべき人々である。人々への思いやりをもって、救いの手を差しのべる安楽寺のようなお寺が増えることは、福祉社会という言葉だけが一人歩きする現代にとって、市民レベルから社会を変えていく最も好ましい状態であるかもしれない。

¹⁶ 「月刊 MOKU」(2010/12) p61 MOKU 出版を参照。

【第5項 妙徳教会¹⁷⁾】

(所在地)

東京都大田区鶴の木 2-37-5

(沿革¹⁸⁾)

昭和 14 年 11 月 22 日、下谷区竹町 6 番地に創立される。昭和 20 年戦災で焼失するも、22 年に現在地に移転建立。昭和 26 年に本堂を、昭和 29 年に庫裡を再建。昭和 60 年書院新築。

(概要)

東京都大田区鶴の木に本堂を構える日蓮宗妙徳教会は、寺院敷地内にあるグループホーム「たちばな」を主体として運営されている。このグループホーム「たちばな」は、ケアマネジメントや訪問看護、訪問介護を主たる活動とする、有限会社妙徳ビハラーを母体とした認知症高齢者が共同生活を行う施設である。グループホームは「たちばな」及び「たちばな式番館」の計 2 棟が併設されており、その施設を中心として高齢者介護が行われている。日本の介護保険制度などに見られる老人介護の現状を憂慮した妙徳教会住職である今田忠彰氏は、両親の介護をきっかけとして妙徳ビハラーを立ち上げた。きめ細かい体調管理やクリニックとの連携により、入居者の体調が回復したケースは数多くあり、重い肝臓病を患っていた入居者がグループホームでの生活を通して、驚異的な回復を見せ、日常生活に復帰した例もある。

このような妙徳教会の取り組みを評価した地域の人々は、高齢者用に所有している建物を役立ててほしいという要望を住職に出し、現在では高齢者専用住宅「あすかホーム」及び「すばるホーム」が妙徳教会別院として運営がなされている。両院は、加齢・疾病・障害などで在宅での日常生活が困難となった高齢者が、少人数で家庭的な環境の中で介護者とともに共同生活を営む暮らしの場である。「あすかホーム」及び「すばるホーム」は終身の入居が可能な施設であり、ターミナルケアについても対応している。

「社会性の無い仏教は、いずれ滅び去る」と今田氏は警鐘を鳴らす。死という厳粛な場において、伝統仏教に携わる人々は死と向き合うという本来の役割を十分に果たして

¹⁷⁾ 妙徳教会については北川順也(2011)『お寺が救う無縁社会』幻冬舎ルネッサンス新書を参考。

¹⁸⁾ 妙徳教会のご紹介<<http://www.tokyonanbushumusho.com/kobetsu/128.html>>(2012/12/5アクセス)を参考。

いるとは言い難い。通夜・葬儀・法事は死者を供養するというだけのものではなく、残された遺族のためのグリーフ・ワーク¹⁹の場合でもある。しかしながら、このグリーフ・ワークは僧侶ではなく葬儀社や病院によって行われているのが現状だ。妙徳教会は、単に檀家に護持されるお寺ではなく、檀家や地域の人々との密接な関係性を通して存続していく本来のお寺の姿をあらわしている。

¹⁹ 大切な人を亡くした悲しみを表現することで、喪失を徐々に受け入れていく過程を、心理学的な手法も用いながら、遺族同士が共有する取り組み。表現された感情を基本的に否定しないのが特徴。遺族同士の自助グループとして営まれることが多く、事故や災害で身内を失った遺族など様々な分野で取り組まれている。(2007-05-10 朝日新聞 夕刊 2社会)

第3章 結論

(3-1. 事例の考察)

前章の具体的事例を通して、地域におけるお寺の社会的活動についてみてきた。これらのケースはみな、日本における社会参加仏教の先駆けであり、伝統仏教寺院の持続可能性を示唆するものである。このように日本仏教に芽生えてきた新たな取り組みから、どのようなことを読み取ることができるのであろうか。

結論を先に述べると、事例にみられるような活動を推進しようとする仏教界の新たな流は、大乘仏教の系譜を継ぐ、日本仏教史上の原点回帰であるといえる。

日本は大乘仏教の流れをくむ仏教が浸透したが、大乘仏教も上座部仏教も、その最終的な目的が解脱にあることから、本質においては軌を一にしている。しかし、上座部仏教に対し大乘仏教は、個人の悟りを求めることよりも、人々を救済し、他社の利益を追求する色合いが非常に濃いものであった。日本の仏教はいまや葬式仏教と化し、仏教としての本来の目的を見失っているが、葬式仏教の歴史は江戸時代に寺檀制度が構築されてからのものであり、本格的に葬式仏教の特化したのは明治時代に入ってからのものである。つまり、日本仏教の葬式仏教としての歴史は実は浅く、仏教が社会問題に積極的に関わることは古くから行われてきたことなのである。

仏教の社会活動の流れは、飛鳥寺と並び、日本史上最古とされる仏教寺院である四天王寺まで遡る。四天王寺は敬田院、悲田院、施薬院、療病院の4つからなる。敬田院は仏教に纏わる儀式や修行を行う寺院そのものであるが、療病院と施薬院は現代でいう病院と薬局の役割を果たしており、悲田院は病人や身寄りのない高齢者を保護するための福祉施設として存在していた。四天王寺が行っていた社会活動は、仏教が社会福祉に大きく貢献した顕著な例であるといえる。

また、奈良時代を代表する高僧である行基は、日本の中でも社会的な問題に踏み込んだ僧侶の先駆けである。当時の僧侶の仕事といえば、国家の安泰や貴族の繁栄を祈ることが主な仕事であったが、行基は建設事業や墾田開発をはじめとした様々な社会事業を推進し、民衆の人気を集めるとともに、民衆の教化を行った。その活動は、労役に駆り出されていた多くの民衆が、役人のもとを逃れ行基のもとに集まり自らも私度僧となる程であり、人の心を強く惹きつけるものであった。行基の活動は僧尼令違反として、布教活動を禁止され国をあげて弾圧されたが、その後も行基は関西を中心として、新たな寺院の建立やインフラの整備を行っていく。行基がその後聖武天皇によって布教を公認され、東大寺の大仏建立のために日本全国を行脚したことは有名な話である。

ほかにも、仏教の社会活動として、平安時代の弘法大師空海が創立した綜芸種智院をあげることができる。綜芸種智院は日本の教育史上、はじめて庶民に対して開かれた学

校であった。当時の教育機関であった大学や国学は、主に貴族に開かれたものであり、庶民に対して開かれたものではなかった。仏教のこのような教育活動は、江戸時代に入っても同様に行われており、その時代に庶民の教育を支えていたのは寺子屋である。また、事例ではお寺を母体として芸術活動を推進する應典院のような取り組みについても紹介したが、お祭りをはじめとする様々な享乐的な年中行事や芸術・芸能の歴史についても、それらは本来的には神仏に奉納するためのものであり、宗教行事として存在したもののなのだ。

本論で概説した仏教寺院の新しい取り組みというのは、個々人の僧侶が意識していないとしても、かつて存在したお寺の社会的役割を取り戻そうとしている大きな流れを形成しているのではないだろうか。そうであるとすれば、それらは先鋭的な寺院による「新しい」取り組みではなく、寺檀制度が確立して以来、徐々に失われていったものを再興しようとする、ある種の復古的運動であるといえる。

(3-2. これからのお寺のあり方)

現在、各地で行われている伝統仏教の取り組みとは、本来的には仏教が積極的に行うべき社会的活動である。しかし、その活動は図らずも、お寺に活気を取り戻し、地域の拠点としての存在意義を確立し、結果的には、現代のお寺の持続可能性を示している。

かつての僧侶がその時代に存在した悩み・苦しみに添った形で、仏教による救済活動を行ったのと同様に、現代の僧侶による社会的活動にも様々なタイプのものがあつた。それぞれ貢献する分野は異なるが、その領域での活動が人々を惹きつけ、かつて存在した、地域の基盤としての寺院を少しでも取り戻そうとしている。これからの日本で存続していく「あるべきお寺」とは、日本仏教の長い伝統に沿った、教育・医療・福祉・芸術に寄与した地域の拠点として存在する寺院なのではないだろうか。

今後、社会参加仏教を目指した仏教寺院の活動は全国的に増えていくであろう。その際に僧侶が気を付けなくてはならないことは、事例で概説したような取り組みを行い、成功を収めている寺院を妄信して、自らのお寺に安易に当てはめてはならないという点である。「先例に倣う」というのは、一種の思考停止状態であり、本来の目的を見失いやすい行為である。事例にあるような社会的活動を行うお寺は、それぞれの地域が必要としているものを生み出した結果、地域にとってなくてはならない存在になつたのであつて、その他の地域はその土地ならではの社会的な問題を抱えているはずである。お寺の存続は、そのような地域へのまなざしを持つことによって、はじめて芽吹くものなのではないだろうか。

仏教の深淵な教義を振りかざし、「言葉」のみによって一切衆生の救済を目指すのではなく、まずはその地域に根差した「苦」を取り除き、人々とお寺の関係性を紡ぎなおすところから、お寺の持続可能性の兆しが見えてくる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、卒業論文指導教員である小熊英二教授に丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。また、日常の議論を通じて多くの有益なご意見を頂いた小熊英二研究室の皆様へ、心から感謝の気持ちを申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

参考文献

- 上田紀行（2004）『がんばれ仏教！』NHK ブックス
上田紀行（2004）『目覚めよ仏教』NHK ブックス
高橋卓志（2009）『寺よ、変われ』岩波新書
秋田光彦（2011）『葬式をしない寺 大阪・應典院の挑戦』新潮新書
虚空山彼岸寺（2010）『お坊さんはなぜ夜お寺を抜け出すのか？』現代書館
山折哲雄監修（2004）『日本宗教史年表』河出書房新社
北川順也（2011）『お寺が救う無縁社会』幻冬舎ルネッサンス新書
竹村牧男（1997）『仏教は本当に意味があるのか』大東出版社
末木文美士（1996）『日本仏教史—思想史としてのアプローチ』新潮文庫
末木文美士（2006）『日本宗教史』岩波新書
末木文美士（2012）『現代仏教論』新潮新書
中村元（1970）『原始仏教 その思想と生活』NHK ブックス
島田裕巳（2010）『葬式は、いらぬ』幻冬舎新書
中島隆信（2006）『お寺の経済学』東洋経済新報社
仏教伝道協会（1968）『仏教聖典』廣済堂
由木義文（2000）『よくわかるお経の本』講談社
鈴木大拙（1947）『仏教の大意』法蔵館
鈴木大拙（1942）『浄土系思想論』法蔵館
- 神宮寺（松本市・浅間温泉）
<<http://asama.chakin.com/jinguu.html>> (2013/1/12 アクセス)
- 大蓮寺ドットコム—大蓮寺
<http://www.dairenji.com/dairenji/dairenji_3.html> (2013/1/2 アクセス)
- 光明寺 - 浄土真宗本願寺派光明寺
<<http://www.komyo.net/web/nenpyou2.html>> (2012/12/20 アクセス)
- 彼岸寺 | 超宗派仏教徒によるインターネット寺院
<<http://www.higan.net/>> (2012/11/1 アクセス)
- お寺の音楽会 誰そ彼 / Twilight Festival - TASOGARE
-<<http://www.taso.jp/>> (2012/11/1 アクセス)
- 安楽寺 浄土真宗 本願寺派（東京都港区）お寺の沿革について
<<http://homepage2.nifty.com/anrakuji/about.html#enkaku>> (2013/1/3 アクセス)
- 警察庁統計資料「平成 24 年の月別の自殺者数について」
<<http://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/H24tukibetsujisatsusya.pdf>> (2013/1/20)

アクセス)

妙徳教会のご紹介

<<http://www.tokyonanbushumusho.com/kobetsu/128.html>>(2012/12/5 アクセス)